
異世界の方、いらっしゃい！

砂上 建

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の方、いらっしやい！

【Nコード】

N4946Z

【作者名】

砂上 建

【あらすじ】

異世界への憧れというものは誰もが持っていたものだ。しかし成長していくと誰もが失ってしまうものでもある。多くの人が異世界というものの存在を気にしなくなったある頃、様々な要因が重なり、異世界の存在を捉えることに成功した。それから時が流れ、街中で普通に異世界人が歩くようになったこの世界で、ある少年に不思議な縁が寄り集まる。

これは、少年？とおはらくぬぎ遠原櫟の個人的な問題の物語である

※そういった描写も今後入る予定なので残虐描写ありにしています

雨、降り注ぐ（前書き）

警告とお願い…ファンタジーと銘打ってはいませんが、ほとんど現代物です。剣と魔法の世界を期待していた方は申し訳ありません。どうかご了承ください。また、誤字？脱字があればどうか教えてください。

雨、降り注ぐ

この世界には昔、「異世界^{いせかい}」というものの憧れを持つ人間がたくさんいた。ただ生きているだけののように感じられてつまらない現実^{まわ}は、太陽と月が周ってさえいれば日々なんて勝手に進んでいく。そこに自分がいるかどうかはどうでもいい——そう思った人間は多く居た。

そして流行ったのがいわゆる「異世界もの」。異世界の住人たちが繰り広げる物語であったり、もしくはそこに現実世界の住人がいたりする話だ。それは現実^{たいくつ}に退屈する人たちの心に強い衝撃を与えた。なかには「自分もいつかそんな世界へ行ってみたい」と思うような人も出てくるほどだ。そうしてみな同じような時期に夢から覚めて、現実と正面から向き合い始める。「ああ、そういったこと^さにあこがれていた時期もあった」、と。

その人たちから子供が生まれ、また同じように現実をつまらないものとして見て、異世界へあこがれる。そしてまた、夢から覚める^さ。そんなことが何度もくり返された。物語というものはくり返されるうち劣化^{れっか}していく。異世界を主題にした作品は溢^{あふ}れるほど生まれてしまい、一昔前には子供にまで飽きられるようになってしまった。た。

そうしていつか世界が「異世界」というものに対して何も感情を抱かなくなっていたある時。ある事件が起こった。その年の一年前に行方不明となっていた一人の高校生の少年が、ひょっこりと家に帰ってきたのだ。

アニメやゲームでしか見たことのないようなファンタジックな服

装の男女を引き連れて。

当然、その少年の両親はその人たちを疑った。何しろその頃にはすでに剣を持って闊歩^{かつぽ}するような時代錯誤^{じだいろく}の日本人は居ないし、外国でも当然そんな危険人物はいない。いたとしてもコスプレイヤーだろうが、1年間行方不明だった少年にコスプレ姿でついてくるような空気の読めないやつは恐らくどこにも居まい。両親が少年に、この人たちはどこの誰なのか、ということを探ねると、少年は聞いたことのない国名を言った。両親が首をかしげると、少年は「自分は異世界に行っていて、ちよつとそこで冒険をしていた」などと言った。この男女はその時の仲間だという。それを聞いた両親は最初信じていなかったが、少年はさらに信じられないようなことをした。

少年の手のひらの上に赤い小さな火の玉が浮かぶ。そしてポンツと小さく破裂^{はれつ}。それは少年が異世界で覚えた魔術の一つであった。それを見た両親はその場で卒倒してしまったが、その後少年とその仲間たちが介抱^{かいほう}し、事の説明に一晚かけてようやく両親には信用された。

一方世間では最初は子供の悪ふざけか何かと言われていたが、少年や仲間に話を聞いていた研究者たちが、数年の研究で異世界というものの存在を捉^{とら}えることに成功すると、世界中が驚愕した。今まで創作の中でしかないと思われていた異世界の存在が、現実之初めて確認されたのだ。昔、異世界を夢見た者も、当時の若者たちも、みな心踊らせていた。そうして発見された異世界へと渡るため、少年の仲間の協力により、世界を渡るために魔術を使われた初めての機械、ポーターが産まれた。世界で決められた外交のための親善大使と、ポーターの安定のために少年の仲間の一人がその世界へと向かった。数日後、彼らが帰還したときに連れてきた魔女^{まじょ}？ベアトリス。彼女の力により、我々はより多くの世界があることを知ったの

であつた――

大城書店『新現代史』序文より

+++++

「あのさ…古賀先生」

「ん？どうした、遠原？」

6月の下旬ごろ、ある高校の教室でオレ、遠原櫟くぬぎは、一人の男性教師と一緒にいた。個人授業、というわけではない。ただ中間テストに失敗して補習と相成ってしまったのだ。教師の名前は古賀近実このみ。クラスの担任であり、世界史の授業を担当している。見た目が中年のオッサンなため、このみというカワイらしい名前が台無しとはもっぱらの話だ。

「先生…：ちよつと語り口調なのがやけにイラつくから、黙ってくれませんか…：？」

イラつくが相手は教師なので一応敬語だ。基本この中年に敬語を使うやつはいないが、望まぬ補習なんていう状況では、相手の機嫌を損ねるのはよくない。

「なんだ遠原、こっちのほうが好奇心やワクワク感が溢れてくるだろう？」

「いえ、むしろツツコミたい衝動に駆られました。なんで壮大な物語の序章みたいな語りなんですか」

「いや、壮大だぞ。具体的にいうと、ここから150ページは続く」

「それは教科書の話でしょう！？　というか、俺の補習科目は数学です！」

この中年は自分の担当すら覚えてないのかとちょっと不安になる。数学の担当は確か青海おうみという、去年入ってきた背の小さい可憐な女性せいの先生なのだが……

「しょうがないだろ。青海ちゃんが急用らしいんだから」

「だからって古賀先生が来ることはないでしょう。さっき語つたのも世界史じゃなくて「新現代史」の内容ですし」

新現代史とは、この世界が異世界の存在を知ってから歴史のことだ。まだそんな頃からは70年近くしか経っていないが、その頃から科学などの新たな発見が山のように見つかり、異世界の人間とのちよっとした交流なども増え、歴史の勉強としてはうってつけのものとなった。そのころからの歴史を新現代史、それ以前を日本史・世界史として扱っている。それはそれとして何でこんなめんどくさがりに見える中年教師が数学の補習にやってくるのか……と思っていると、加賀がやれやれ、というような表情をした。

「青海ちゃんはいねえけどよ、ここにいる可愛い近実ちゃんでもあ、我慢してくれや」

「すみません先生、気持ち悪いのでトイレで吐いてきます」

吐かないと体内から腐りそうなので、とは言わないでおこう。中年にはやさしく。しかし教師には厳しく。

「待て。……俺も行かせてくれ。あんなことをいうのはやっぱりやめておいたほうがよかったな……すまん」

「自分で言うとおいて何いってるんですか。許してくれるんならもう今日は帰ってもいいですよね？」　というか、帰らしてください」

外は生憎あいにく……というか、梅雨なので当然のように雨が降っている。しかも、朝のニュースにでてきた気象予報士からも「満タンのバケツをひっくり返したかのような雨」というお墨付きももらっている

ほどの土砂降りだ。クラスメイトたちが帰っていった時はまだ普通だったが、2時間ほど補習を続けている今は……もう、圧倒的に違う。雨が窓を叩く音がしきりに教室や廊下から響いてくるってのがおかしい。これ以上強くなれでもしたら、傘も保たないんじゃないか？

「いや、ダメだ。こっちだって頼まれたからには最後までやってやらないとな……」

「えー、そりやないでしょう。これ以上雨がひどくなったら傘があっても濡れるかもしれないじゃないですか」

「そりゃあ、こっちだってさっさと終わらせて帰りたい――」

「……あ」

――今気づいた。これ、別に長々と続ける必要はないんじゃないか？担当の教師はいないし、そもそも何か課題が出されてるわけでもない……多分忘れたんだろうな……そうなるここにいる意味が特に無いうえに二人とも帰りたい……そのことに加賀も気づいたように一瞬アホみたいな表情になったが、そこは自称「可愛い」近実ちゃん。この場をどうすればいいかすぐに気づいたようだ。「しょうがねえから今日はもう帰れ。日を改めて青海ちゃんの都合がいい日にな」

完全な棒読み、ありがとうございます。この時点でうまくごまかせるかな、という不安な気持ちは吹っ飛んだのでオレもちゃんと返そう。

「え、本当ですか、ありがとうございます」

一瞬、加賀が「お前、そこはもうちょっとがんばれよ……」みたいな目を向けてきたが、あんたが言うな。気をつけてなー、という声を背中に軽い足取りで傘とかばんを手にとって、教室を出る。

雨のせいか雲のせいか、外は少し暗かった。

+++++

私立深根魔術^{みな}高等学校。それがこの学校の名前だ。今はこの魔術学校というのは各地にある。どうやら魔女ベアトリスがこの世界にやってきて始めた事の一つに、魔術の教育というものがあるらしい。異世界との接触^{せつしょく}にはどうしても機械以上に魔術の力が必要、ということらしく、魔術を扱える人間を増やすために始まった世界規模のプロジェクトだ。ただ最初は教える事のできる人の数も限られており、少人数のエリート教育だったが、今ではそういった事はなく、こうして普通に私立でも立てることが出来るようになっていく。国立でもエリート主義でもなんでもないので、俺のような奴も通えるような気軽さだ。普通の学校としてもそれなりのレベルであるから、ここを希望する学生も多いという。女子の制服も目立ったりするようなどころや、派手なところは無い（とはいっても魔術学校の制服と普通の高校の制服は見た目からして違うが）が、着る者の可愛らしさを十二分に引き出せるため、入学を狙う娘^こもいるほどだ。入学はせずに制服だけ買おう、という人のために、制服自体は誰にでも売ってくれるらしい。一応うちにも2着ほどはある……家族のだが、そしてベアトリスがやってきてから変わった事と言えばもう一つ、街並みが少々おかしくなった、というか、コスプレみたいなのが増えた。間違えてはいけませんが、異世界からの来訪者達や、自分の世界から転移してきたやつらだ。コスプレイヤーと間違えるのとてつもなく怒るので要注意。どうもこの世界は様々な世界の集まりの中でも中心の方に位置するらしく、色んな世界から人が流れてくることがあるらしい。異世界の人間を元の世界に帰すことは、本人が希望すれば行われる。しかし帰すのは簡単らしいが、こちらの世界の人間が異世界へ行くのは結構難しいようだ。ベアトリスと遭遇して帰ってこられた親善大使たちは結構運がよかった、ということだろ

う。

異世界の話ついでにあと一つ、実は世界自体は色々と分かれているが、そこに住む人々はほぼどの世界も同じと言われている。平行世界、というやつだ。たとえばさっき出た少年の仲間だった男女はこの世界ではイギリスのカップルだったらしく、テレビに映ったファンタジーな衣装を身にまとった自分たちを見て「見ろよ俺たちすげえ格好してるぜH H A H A H A ! !」などと言いながらイチャイチャしてたそうだ。爆発してしまえ。ただ、どこの世界も同じ人間しかない、というわけではなく「元の世界では生きているけど、別の世界では死んでいた（逆も可）」「自分の世界では過去に生まれていた人間 or 未来に生まれるはずの人間が別の世界では今生きている」なんていうこともあるらしい。

時代を遡さかのぼれば刀を持っていた侍が歩いていた、ということがあったが、今ではプレートアーマーたいけんを身につけ、大剣を背負う人間も珍しくはない。同じ顔の人間は3人いる、という言葉も今となっては3人どころではなく、死語になって久しい。異世界の存在が珍しいのだ、新鮮だのといった気持ちも最近では、今さらという感じがする。もはや今の時代は基本的に異世界すらも当然の存在として見られている。例外もあるにはあるが。

「（別にドライだとは思ったりしないが……あれだけ盛り上がったわりには、一気に冷めたような気がするな……）」

初夏だというのに、雨のせいで外の空気は冷たく、雨独特の臭いがする。少し嫌な気分で帰る途中、商店街を抜けようとすると、黒いリムジンが横を通った。なんとなく見てみるとスモークを張っていなかったのでもち乗っている人が見えた。確かこの前、道のど真ん中にいきなり剣を持って現れて、姫がどうだのと叫んでいた騎士だったか。その時とおなじ鎧よろいを着て車に乗せられていた。

「（鎧を着て車に乗っていた……となるとやっぱり、元の世界に帰るんだろうな……）」

あの時来た騎士の顔と剣には血がこびりついていて。そして、姫がどこにいたのか聞いてきたりしたらしい——多分彼はここに来るまでに戦っていた。恐らく、『姫』という人物を探し、あるいは救い出すために。そんな大事な戦いから一気に別世界へと飛ばされた彼の気持ちを、悔しいのだろうな、としか自分では測ることはできなかった。

さらに進んでいると、真っ赤な髪の毛の男がエプロンをつけて野菜を売っていた。その髪の色に買い物に来たおばちゃんは怯え気味だったが、男の紳士的にしようとして失敗しているが、裏表はなさそうな態度にとりあえず、落ち着いているようだ。

あの男も確か先ほどの騎士のように、この世界に突然やってきた人間だったはずだ。そんな彼が今もこの場にいるのは、この世界にしていることをよしと思ったのだろう。帰ることも可能だが、こうしてこの地に残ることも可能だ。その場合、保護責任者が必要となるが、それはこの世界の一般市民なら誰だっていい。彼の場合は八百屋の主人だろう。歩きながら見ていると、男がおばちゃんに傘をあげている。それをもらったおばちゃんが顔を赤らめ……ちっ、ただのフラグ乱立主人公野郎か。爆散しろ。

+++++

商店街を抜け、家の近くの道へとたどり着く。傘ももうほとんど意味がないなあ、などと思っていると、道の向こうから走ってくる

一人の少女が視界に入る。

その瞬間、心のうちにドス黒い感情が芽生え、それが一気に身体中へと伝わっていくのを感じた。

頭が、彼女の存在を認識しようとする。足が、彼女の元へと駆けていこうとする。……手が、彼女を捕まえようとする。いったい何がどうなっているんだ？という思考をはさむ暇もない。ただ、必死で黒い感情を抑えようとした。傘を手から離し、「満タンのバケツを思いっきりひっくり返したような水」を一気に身体に浴びる。目を覚まさせるのには顔を洗うのが一番いい。もつとも目がスッキリする。こんな寒い状況だと、雨水もわりと暖かいような気がするな、などと考えられるようになったあたりで、黒い感情は溶けるように消えていった。

「（いったいなんだったんだ……？あんなふうに憎むような相手なんていなかったと思うが……）」

考えても仕方ないか、と思考を中断する、というかこれ以上は濡れたくない。濡れた服の洗濯も楽ではないのだ。もう意味があるのかわからないが無いよりマシなので傘をとって、さっさと家に帰ろう……そう考えていると、目の前に、おそらく先ほど向こうから走ってきたであろう少女が息を切らしていた。どこの学校かはわからないが、制服を着ているという事は、学生だろう。なぜか傘を差していない少女の顔を見ると――少女は涙を浮かべていた。雨水と涙でどちらかもわからないほどに顔が濡れているが、嗚咽が混ざり、手で目元を拭う仕草は泣いているようにしか見えなかった。

「遠原……さん」

――オレを、知っている？本当に誰だ？こんな子をオレは、知らない。頭の中で知り合いにこんな人はいただろうか、と必死に思

い出そうとするが出てこない。その内、彼女が俺に抱きついてきた。

「遠原さん……お願いです。私を——助けてください……」
頭の中に、結局彼女らしき人物が出てくることはなかった

雨降って、自乾かす

「た、ただいまー……」

家についてすぐ、できる限り小さな声で、あいつが先に帰っているかどうかを確認する。今の状況においてあいつはいない方が都合がいい。玄関に靴があるか見てみると……あ、ヤバイ、居る。しかし今のウィスパーパーボイスが、聞こえているとは考え難い。今から一気に二階の自室まで行き、服を素早く着替え、居間に行けば、当然帰ってきていたのかと聞かれるだろう。そこで「一応居るかは確認したんだけどなあ」と言っておけば、この場は多分乗り切る事ができる。

——よし、それじゃあミッションスタ

「遅かったですね、兄さん」

き、決めようとしたのに……

奥の部屋から目の前にやってきたのは、遠原^{とおはら}^{かしわ}櫛羽。少し長い後ろ髪を、一本の極太な髪^{ていくぶと}の毛のように縛っており、眉^{まゆ}の辺りの高さで綺麗に切りそろえられた前髪の下から見える目は、普段から針のように鋭い。雨で濡れ濡れな俺を見る今の櫛羽の目つきは、……針山と言われてもいいぐらいに鋭さを増している。今にも刺^さされそうだしっかり者な櫛羽は、こういったことにとても怒りやすい。俺が傘を持って行っているのも知っているので、なんで傘を持っていったはずなのに頭からつま先までこうも濡れているのか、と疑っているんだろう。正直に「わざとやりました。てへっ☆」とか言ったら多分、説教^{せつぎょう}コースになるだろうなあ……

「……兄さん。なぜ傘を持っていきながら、そんなにもずぶ濡れなのですか？」

+++++

「遠原さん……お願いです。私を——助けてください……」

土砂降りの雨が降り続ける道の真ん中で、オレは一人の少女に助けを求められた。いったいこの娘は？ どうしてオレの名前を？ 考えることは多くあったが、頭が回らない。どうしようかと考えようとしていると、

「「—————つくしゅん」」

目の前の女の子とほぼ同時にくしゃみが出た。

「……………」

「……………」

……とても気まずい。雨を浴び続けていたんだから、身体が冷え切ってしまったっていてもおかしくないだろう……。それはそれとして、オレはまだいいが、女の子が体を冷やしてしまうのは良いことではない。

「あー……あのさ……」

「は、はい……なんですか……？」

彼女が顔を上げてこちらを見上げる——よく見れば、この娘、相当な美少女だ。雨で髪が潰れてしまっているが、首にかからないぐらいの薄い茶色のショートヘアであることは分かった。泣き顔も綺麗な^{きれい}だったな、と思ってしまったが泣いている顔なんて、そう見ていて気持ちのよいものではない。

「とりあえず、ちよつと付いてきて。そこでタオルと……よかつたら、シャワーとかも貸すから」

「え？ い、いえ、あの……それは……ちよつと……」

「ちよつと待った、君、多分勘違いしてる。確かに家に行くけど、

ちゃんと妹もいるから。頬ほおに手を当てて顔を赤らめたりする必要ないからね？」

いきなり顔を赤くしてポツ、となったので一瞬いつしゆん焦りそうになったが、この雨の中だとすぐに頭が冷える。おかげですぐに理由がわかった。出会って早々《そうそう》家に誘って、いきなりシャワーを浴びさせるナンパがこの世にあるわけないだろう……

「……妹、ですか？」

「……うん、まあ、妹。だから君が顔を赤くするような事態は——へくちっ！……とにかく一度、身体を暖めよう。じゃないと二人とも風邪ひくと思うから……」

さっきはこんなに寒いと雨水も暖かい、なんて思ったが、今はもう無理だ。そんなこと言える元気なんて無い。頭からお湯を被りた。傘は当然とうぜん、女の子のほうに持たせることにする。二人ともすでに思いつきり濡れてしまった後だから効果なんてあるんだかわからないけれど、女の子を濡らして帰るなんて……やだ、なんかこの言葉ちょっとエロい……

「それじゃいこう……できるだけ、早く。話もそこで聞くからさ」

「……妹……妹……？」

……なんだかボーっとしてるな。よく聞こえないけど何か言っているみたいだから意識はあるんだろうけど……しょうがない、手でも引いていこう。

「うーん……いたかなあ……そんな人……」

手を引いていく途中も何か言っていたみたいだけど、やっぱりよく聞こえなかった。

+++++

——ここに彼女を連れてくることになった理由がある程度
かいつまんで樫羽に聞かせる。が、なんだか反応が薄いというか：
：反応していないような……。試しに目の前で手を上下に動かした
り、頬を引っ張ったりしてみるが反応がない。あー……いつもの『
あれ』か……

「うん、問題なさそうだ。ちよつとタオル取ってくるから待って
て」

「え？あの……妹、さん……は……？」

「大丈夫。こいつは時折ときおりこういうことがあるんだ。特に悪いこと
をするわけじゃないから無視していいと思うよ」

「は、はあ……」

バスルームのほうへ行き、二人分のタオルを取ってくる。廊下に
水が垂れるのは嫌だが、その辺はあとで雑巾ぞうきんで拭いておけばいい。
持ってきたタオルを少女に渡して、オレも服を脱がずに拭ける部分
を拭いておく。

「あ、ありがとうございます。それでお願いしたいのは——」

「いや、その前にシャワー浴びてくれば？体も冷えてるだろうし」

「い、いえ、着替えがないので……シャワーはちよつと……」

「あ、そうか……でも樫羽の服を、って意識が飛んでるんだった
……」

うーむ……よく考えるとこの娘は15歳の樫羽よりも年上のように
に見える。サイズが合うかどうかとも心配だ。かといって家にはあと
はオレしかないが……少女に貸せるものといえば大き目のYシャ
ツとトランクスぐらいしかないけれど……だめだな。イメージして
みたがオレの趣味しゅみじゃないし、樫羽が目覚ましたらなんて言うか
となるとここはこうするしかないな。

「名案を思いついた。ちよつとここで待ってて。君が着れるよう
な服を取ってくるから。ちゃんと、女物をね」

「え？妹さんが気を失ってますけど……あ、もしかしてお母さま
の？」

「いや、櫛羽の服」

ダッシュで階段を上り、櫛羽の部屋のドアを力強く開ける。思春期^{ししゅんき}だからか、13歳ぐらいになったと同時に「兄さんは入っては駄目ですよ？」なんて言われてからこれまで入ることはなかったが、今、再びこの部屋へと入ることにした。…ふむ、散らかってないし、壁にアイドルのポスターを貼^はってたりもしないし、友達が来たような跡もない。が、今それはどうでもいい。問題は彼女に着せる服だ！部屋全体を見回すと、目的の衣服なんかが入っているであろうタンスを発見。それに近づき、手を伸ばす。

さて、人が入浴、もしくはシャワーを浴びた場合に必要なのは、当然着替えだ。普段ならその前に着ていた服を着てもいいし、今回のように服が濡れていたりする場合は服も替えを用意しなければいけないが、どちらにしろ、替えなければいけないものがある。

——そう、下着^{したぎ}だ。それは現代人なら誰だって替える。万が一、普段は替えないといっても、現在のあの雨の中をずっと傘も差さずに走っていたなら、確実に下着も濡れているはずだ……これもちょっとやらしいな。だが、だからこそ、彼女には服だけではなく下着を、必ず下着を持っていかなくてはいけない。こんな空気が冷えきった日に、上下で着けないなんて事は絶対にダメだ。ほら、よく女性^{おんな}は冷え性だって言うしね！だからこれはちよとした紳士的な親切なのだ。きっと櫛羽だって許してくれる。現在の櫛羽のスリーサイズを推測するための材料をさがしても、言わなければ櫛羽は許してくれる。オレは、櫛羽を信じよう。

「櫛羽……これはきっと人のためになる。だから何も言わず」

——————タンスを空けようとした瞬間、わき腹に槍のように鋭く、鉄球のように重いドロップキックが炸裂^{さくれつ}した。倒れながらも意識が飛びそうになるのを必死で抑^{おさ}えていると、首根っこを掴まれて、部屋の外に放り出された。櫛羽め……復活したか。しばらく廊下でボロ雑巾のようになってうずくまっていると、部屋の中から両

手で服やらを抱えた檜羽が出てきて、俺を見るなり、

「おや、ゴミクス兄さんではありませんか。居間で正座でもして
いて待っていてください………すぐに行きますから」

そういつて下の階へと降りていつてしまった。………どうやらオレ
はボロ雑巾ではなくゴミクスだったらしい。

+++++

その後、居間に行ったらすでに待ちかまえていた檜羽から、遅い、
と言われてアイアンクローをもらい、正座で30分ほど説教をされ
ていると、連れてきた少女からシャワーから上がったことを教えて
もらい、檜羽から逃げるようにシャワーを浴びに行った。

で、25分ほどたつてシャワーを上がり、居間に行ってみれば……
1時間近く前自分に助けを求めた時とは真逆な、敵を見るような
目で少女がこっちを見ていた。さては檜羽め、さっきのあれの事を
教えたな………？

「……遠原さん、最低さいてです」

「ああ、最低野郎のクス兄さん。ゴミは洗い流せましたか？」

二人のこちらを見る目が、とても冷たい。少女のほうは檜羽と比
べて、ショートヘアから出てくる、かわいい女の子らしさから冷た
い視線も弱く感じるが、檜羽のそれと合わせると、さっきまで熱い
お湯を被っていたのに恐ろしさで冷や汗が出そうだ。

「……いや、さっきは本当にすみませんでした。どうか許してく
ださい」

「ふむ。まずは夕食を作ってからですね。その後なら話を聞いて
あげます………あなたも、それでいいですね？」

檜羽からの提案に少女は不本意^{ふほんい}そうだったが、まあいいです、と頷^{うなづ}いてくれた。

「寛大^{かんだい}な処置^{しちし}をありがとう。それじゃあ急いで作ります……はい」それにしても、随分^{ずいぶん}と優しい提案で助かった。いつだったかの時みたいに1ヶ月の間、檜羽の身の回りの世話をするみたいなのじゃなくて本当によかった……さっさと準備に取りかかろう。もう午後七時をまわっている。檜羽が空腹でキレたりする前に急いで作るか……

+++++

「いただきます」

「い、いただきます…」

午後八時、普段より遅いが、夕食が完成した。少し煮込む時間が足りなかったが、クリームシチューだ。まずは檜羽が一口、上品そうに食べる。

「……よいですね。合格点です。」

「そりゃ、必死で作ったからな。でもそんな肩肘張らずに、気楽に食ってもいいんじゃないか？」

「いえ、いつもこういう食べ方なので……むしろ兄さんの食べ方がみつともないと思いますが。ご飯ではないのですよ？」

「左手で皿を持ちながら食べても良いのが家庭料理だ。それが駄目ならどこかレストランで食ってこい」

家でまでそんなマナーを気にしてもストレスにしかないだろう、と言ってやりたいが説教くさいから止めておく。自由に食べさせるのが一番だ。

「わざわざどこかの店に行かずとも、兄さんの料理なら充分満足できますよ」

「……へいへい、お褒めの言葉、ありがたく頂戴しますよ」

樫羽がこちらに笑いかけてくる。笑ってるときは本当に無害なんだよなあ……。しかし、褒められたのは嬉しい。もう一人にも聞いてみるか。

「君は……ど……う……?」

……なんか凄くがつついてる。この娘、多分おしとやかな方だと思うんだが……それとも食事のときだけこういう感じだったりするのか?

「………あ、はい、とっても美味しいです!何か特別なこととかしてるんですか!?」

「いや、特にはしてないけど。というか……よく食べるね」

「……あ」

さっきまでとても勢いよく喰らいついていたのに、いま気づいたようだ。顔を赤くして恥ずかしがっている。聞けば、食事を摂るのが1日ぶりのこと。それなら恥ずかしがることはないと思うが、彼女にとってはどうでもよくないらしい。自分の醜態^{しゅうたい}を思い出してどんどん顔が紅くなる。かわいいなあ。

「す、すみません。家に上がらせてもらった上にシャワーと夕食まで……」

「頭を下げることはありませんよ。時間も時間ですし、兄さんを頼ってきたのに何もしいまま帰すわけにはいきませんから」

「そうだな。謝ることじゃないと思う。頼るっていつでも、結局まだなんのことは聞いてないけど。ねえ………」

あれ?そういえば……

「?……なんですか?」

「………そういえばさ。まだ名前聞いてなかったよね?」

「…兄さん。普通は最初に聞くとおもいますが?」

「いや、ちょっと間が奇跡的に外れて………そういうことだから、ダメな人を見る目をしないでくれ……」

誰だってシリアスなところできしゃみが出たら調子は狂うだろう

と思うんだ。これには少女も苦笑いをしていた。

「そういえば、そうでしたね。本来なら最初に名乗っておくべきだったのに、申しわけありません」

「いや、それは謝……った方がいいかな。礼儀としてはダメなわけだし。それで名前は？」

「はい。私は天木鹿枝あまぎ かえといいます」

やはり自分が会ったことのある人かどうか、確かめようとしてみたが、会うどころか聞いた事もなかった名前だった。

「天木さん……か。それじゃあ天木さん。何をオレに」

「兄さん。まずは夕食を食べませんか？食事の場で話すような内容ではなさそうですし、それにシチューが冷めてしましますよ」

檜羽がオレの言葉を遮るさへぎように言った。確かに食事時に事情を聞くのはよくなかった。警察が尋問じんもんをするわけではないのだし、やめておこう。シチューも見れば、湯気が少し薄くなってきたしまっている。

「……それもそうだ。じゃあ、話はこれを食べた後で」

「はい、わかりました」

今は食べることを優先したいのか、天木さんは素直に頷いてくれた。……この娘のことだし、言っておいた方が良さだろうなあ。

「……言わないとやらなさそうだけど、おかわりはしてもいいからね？」

「は、はい……わかりました……」

礼儀正しいのはいいんだけどなあ……打ち解けられるといいんだけど……

この日、シチューの入った鍋の中身はものの見事に空からになった。

雨降って、自乾かす（後書き）

すみません、ところどころ言葉が足りない箇所があったのでそのあたりを直しました。

雨の日の終わり（前）

夕食の後、檜羽^{かしわ}は宿題があると言って自分の部屋へと上がって行った。普段と何一つ変わらない自然な態度でそういつていたが、自分がいると天木さん^{あまぎ}がオレに相談し辛いだろうから、と気を回してくれたんだろう。けれど食器を洗うのを手伝うぐらいはしてほしかったが……さきほどのあれのことで負い目があるので、少々頼みづらかったのでやめた。

天木さんには居間の方で待ってもらっている。お客さんなのに、手伝いますなんて言い出しそうだったからその辺に転がっていた新聞を読ませているのだが……失敗だったかもしれない。すごい集中して読みこんでいるみたいで、周りに人なんていないような空気が出ている。おかげで特に話したりすることもなくただ黙々と作業が続く。今この部屋では食器を洗う音と、たまに聞こえる新聞をめくる音しか聞こえないのが「話すことなど何もない」というような風に見えて、とてもきまづい。せめてこれが「私たちの関係に言葉はまらないわ!」というような感じだったら大歓迎なんだが……
……しょうがない、こっちから話しかけてみよう。まずは、この重苦しい空気からの脱出が先決だ!

「ねえ天木さん。それ、面白い?」

「……はい、とても参考になります」

よかった、答えてはくれるみたいだ。これで何も返ってこなかったら嫌われてるのかと疑うところだった。

「へえ、そうなんだ。よかったね!」

「はい。……………」

「……………」

なんか返して! 天木さんお願いもつと言葉のコミュニケーション

とって！洗い物してるのに、手じゃなくて心があかぎれしちゃう！

「……櫛羽さんって、いい妹さんですね。遠原さんと血がつながっているとは思えません」

頭の中で悶えていると天木さんから助け舟のように話題が出された。しかし、その話か……ちょっと気乗りしない。

「まあ、櫛羽のことは長年ちゃんとしつけてきたからね。父さんも母さんもどこかへいったきり帰ってこないし……大変だったよ」
多分、当たり障りのないであろう答えを返す。だけども思い返すと本当に大変な日々だった気がする。2年前までのあのころを思い出すと、一日一日の軽い、本当に激流のような毎日だった。

「……でも遠原さんはちゃんとしたしつけをされているようには見えませんか」

「……それちょっとひどくない？」

ふふ、と天木さんが軽く笑っている声が聞こえる。冗談だったのかな？

それにしても櫛羽が部屋に行ってからなんだか緊張している感じがなくなったように思える。いいことだとは思うんだが、もしや櫛羽に何か原因があったりするのだろうか？後でちょっと聞いてみるか。

+++++

食器洗いを終え、ようやく天木さんから話を聞いてあげられそうになった。天木さんの向かいのイスに座り、息を落ち着けるために深呼吸をする。

「それじゃあ、天木さん。ちょっと遅れちゃったけど、どういった事情か……聞いてもいいかな？」

「……はい」

天木さんも一度、頭の中を落ち着かせるためにしばし無言になる。やがて、どう説明をすればいいのかがまとまったのか、天木さんが口を開いた。

「遠原さん……今、私は——追われているんです………あの男の人に……」

「……………」

天木さんの表情が、曇る。しかしその表情の重さとは裏腹に、言葉が次々とそれまでどこかに溜められていたかのように一気に天木さんの口から出てきた。

「……私はそれまで、あの人からそんなことを考えられないほど仲良くしてきたんです。まだ歳を片手で数えられるようなころから……ずっと。ずっと、ずっと一緒にいたんです。あの人がどんなにも優しい人か知っていたし、ケンカをするようなことも無かったです。それなのに、最後に見たときの彼は何かを見失ったように私にナイフを向けて……あの日は、久しぶりにあの人に会えると思って楽しみにしていたのに……！」

「最初は何かの間違いか、冗談のつもりかと思ってたんです……！でもあの人は何も言わず、私にいきなり切りつけてきました。そこから先はただただ、彼のことを恐ろしいものとしてしか見る事が出来ないんです……！逃げて、逃げて……そしてその度に彼は追いかけてきて……！自分がここにいることを教えるように私が逃げる先に……切り刻まれた……動物の死体を……！」

「それを何度も繰り返ししていく内に、どこまで逃げても無駄で、きつといつか彼が私に辿りついてしまうだろうと思いました……今でも彼が私を追ってきているのではないか、不安です。でも、絶対にあの人には殺されなくなかったです……！だから……私は……！」

!!」

天木さんは一言一言を震える声で発し、どんどん語調が強くなっていく。そして言葉が強くなればなるほど彼女の心の傷も、強く乱暴に触れられ、痛む。涙が、天木さんの目から流れでた。記憶が刃となり、涙という血を流すその姿は、自分を傷つけているかのようで……見ていられなかった。

「それで、私は……!!」

「天木さん!……もう……やめなよ。何をそんなに悩んでいるのかはわからないけど……だからって、天木さんが自分を傷つける事はない」

話を聞いていても、彼女が悪いところはひとつも無い。なのに、なぜ彼女はこうも泣く? こうも自分を傷つけようとする?

「……遠原……さん。私は……自分を傷つけてなんか……」

「いないって? それはないよ。じゃあ、なんで最初に自分とその追ってくる男のそんな過去を言ったりしたの? そんなことをしても、そのころのことを思い出して余計に悲しくなるだけだ」

でも、きっとそれはオレには分からない彼女のこと。その男と歩んできた人生で、彼女が積み重ねてきたもののだろう。

「……違うんです、遠原さん。そういうことでは」

「……ごめん。こんなこと言って。でも、天木さん。そんなにも悲しかったのなら、こっちはこれ以上君から事情を聞くつもりはない。それと……これ以上そのことは思い出さない方がいい」

だから、オレは——彼女が積み重ねてきたものを崩そうとした。数年か、それとも十何年か。長い間彼女が積み上げ、そして、彼女の中に残せばきっと永い間彼女を苦しめるであろうものを、壊そうとした。

「……………忘れることなんて、できません……」

だけど、それは出来なかった。きっと、それで苦しむはずの彼女

が、許さなかった。

「……………こっちも強制したいわけじゃないけど……………それで、君は大丈夫なの？」

「遠原さん……………私が最初にあの人のことを言ったのは、最初は無意識でした。でも遠原さんの言った事を聞いて、なぜそんな事を言ったのか分かった気がしてきました」

「……………それは、どういう？」

彼女はそれまでの口調よりも軽く、口元を歪め、自嘲じちやうするように言う。

「要するに諦めが悪かったんですよ、私。逃げていたのに、あのころの彼を取り戻すって心のどこかで思っていたみたいで……………だから私が覚えているあの人の姿を忘れないために、その思いが彼を思い出させていたんだとおもいます」

「天木さん……………」

「おかしいですよ。逃げている人間が、追っている人を恐がっているのに助けたいなんて。矛盾むじゆんっていうのはこういう……………」

「おかしいことなんて、何も無いんじゃないか？」

彼女の顔を見つめ、オレは彼女の言葉を遮る。彼女は目を見開いてオレを見る。目つきは笑っているように見えたが、目は赤くなっている……………やっぱり、おかしいことなんて何もない。

「えっと……………その人のことは知らないし、オレがそこまでされても助けたい人っていうのは、すぐでてこないんだけど……………自分の気持ちが矛盾している、とかそういうことは気づいたのなら認めればいいじゃないか。合ってない気持ちもその理由も、全部。そうして考えたのならきつと、逃げてでも救おうとしてもいいんだ。間違いないて無い。少なくとも、オレはそう思う」

「でも私は逃げたんです……………！彼が来ないような、居ないようなところへ逃げよう……………！」

「それは……………分かってる。だけどオレは……………天木さんの今やりたいっていうことを助けるだけだ。それしかできない。だから、

決めてほしい。今の君が助けを望むのはその人か、それとも……君自身か」

我ながら、強引なことを言っていると思った。それに何よりも卑怯だった。彼女が優しい人であるということを知っていて、人を見捨てるかどうかという二択をかけた自分が、とても汚く感じる。

1分、2分と言葉の無い時間が過ぎていく。けれどこれは、さっきの会話をしただけだったときとは違う。彼女が自分で答えを考える時間を、そんなものと一緒にすることはできなかった。そして15分が経つ。

「……遠原さん。私、決めました……あの人を、いえ、私が一緒に過ごしてきたあの人を……取り戻します」

+++++

彼女の顔にはもう、自嘲するような笑いも、後悔の涙もなかった。胸の奥のつかえが取れた——そんな顔つきになった彼女にオレからは、もう何も言う気はなかった。ただ一言だけを除いて。

「……そうか。じゃあ、がんばろうか……オレ達で」

「……………はい！」

これが、今のオレにできる唯一の励ましだと思っている。彼女——天木さんはそれを聞いて笑顔を向けてくれた。だけど、それはこの答えに無理やり導いたような自分には、とても眩しくて……照れたように顔を背けるしかなかった。

ふと、そこで天木さんが「あ、でも」となにか思い出したように言い出した。

「その……少しだけ、なんですけど……遠原さんのこと、信用でき

なくなっちゃいました。あんな卑怯な質問をするなんて……ちよつとずるくないですか？」

……気づかれてるじゃないか、オレ。え？何でバレたんだ？え？態度に出したつもりはなかったぞ！？しかもなんか好感度が下がってる！？うそお！？というか、

「そ、それなら別に助けるっていうほうを選ばなくてもよかったんじゃない？……しかもこんな人を騙すようなやり方にのるなんて」

「そうですね。ちよつとイラッとはきました。なんでこんなにも偉そうなんだって。でも……自分で考えてみた答えも結局それだったんです。彼を助けたい……今までは気づかなかったんですけど、気づいたら、考える以上にその想いつてのは大きかったみたいで。だから……私は遠原さんの策に乗ってもいいかと思ひまして」

天木さんは、てへっ、と言うような感じでちろりと舌を出すのだから……策で。そんな大層なものじゃないと思うが……まあいいか。

「……うん、でも君もある意味俺の予想以上だったよ……」

そう、予想以上に——「いい人」だった。優しいとかのレベルじゃなかった。なんだか騙したと思ったら騙された気分だ……。疲れと呆れの籠もったため息が口から漏れる。

「でも、遠原さん。なんであも無理矢理に私を手伝おうとしたんですか？……遠原さんは、私のことを知らないみたいですけど」

「んー？……まあ、父さんがやってることの真似、みたいなものかな。血筋なのかもしれないけど……」

天木さんの話が一段落ついたとおもうと、心にどっと疲れがわく。話の内容が重かったのもあるが、途中で少しかっこつけすぎたかもしれない。体を伸ばして疲れを取ろうとする。

「遠原さんのお父様……ですか？」

しかしまあ……なんだ、完全に雑談モードに入ってるな、二人とも。さっきまでまじめな話をしていたとは思えない。というかこの空気はどこか友達と一緒に勉強をしているときの感じだな。途中で力が抜けて完全に話すことがメインになって……そうして本来の

目的を忘れる。オレにもそんな経験が何度もあったなあ……。

「そう。紳士的とはいえないんだけど女性に、助けて、とかいわれたら二つ返事でOKしたりして。しかも困っているのを隠していてもなぜか分かるみたいでさ、ほとんど無理矢理に近いぐらい手助けしてたよ。確か、櫛羽を拾ってきたのも父さんで——」

「え？拾ってきた？」

……オウ、ジーザス。気を緩めすぎて、ついいいらんことまで話してしまった。これも結構面倒な話だからあまり言いたくはないんだが……もう言っちゃったし、話したほうがいいか。

「あー……うん。確か10年ぐらい前、オレが六か七歳ぐらいのころのこどもの日に父さんがいきなり帰ってきて、女の子を連れてきたんだよ。5歳ぐらいの。で、オレのところにくるなり「この子うちの娘にしないか？」とか言いだして柏餅を与えだしたときは何事かと思ったよ……しかも櫛羽が父さんにすごく懐いてちょっと本気にしていたみたいだし……それでいくらなんでも誘拐犯扱いされるのはごめんだから親御さんのところに送ろうとしたんだけど、どこかの異世界から来たっていうことしかわからないし、櫛羽ももともとの名前を覚えてないって言うから、とりあえず家で引き取ることになったんだ。で、今のところのあいつの戸籍は遠原櫛羽——」

オレの妹として登録されてるってことかな」

血も何も繋がってないけどね、と最後に付け足しておく。いやー……ほんと昔から父さんの行動には驚きというよりも呆れしか出ない。昔だったからまだ良かったが、今やられたら確実にオレがグレート父子間戦争をおこすことも考えるレベルだ。

ちなみに、櫛羽と言う名前は櫛羽が父さんからもらった柏餅の「かしわ」という言葉の響きをいたく気に入ったため、名前の分らない櫛羽のために名前をつけるということになった時、父子で「櫛羽」でいいんじゃない？と適当につけた結果だ。最近になって自分

の名前に違和感を持ち出した櫛羽には絶対に言えない話である。

「……………え、えーと……………」

天木さんが理解のできない、と言いたげな顔をしてる。まあ、息子のオレでもあの父親は未だに理解できないからしょうがない気がするが。

「あの……遠原さん」

「ん？なに？」

「異世界って、どういうことですか？」

……………え、そこから？

雨の日の終わり（後）

そういえば、聞いたことがある。今や多くの異世界の存在が知られているが、見つかっていない、もしくは交流が無い世界の方が多いという話を。見つかっていない世界はただ存在が捉えられていないだけで、その人間が流れてくることはある。が、交流が無い世界というのはそれとは別で、まずその人間がやってくるのが希少である。埋蔵金の発掘と同レベルと言ってもいい。

そして、何よりも——発展してきた文化がとても似通っているということが問題となる。そもそも、今オレ達がいる世界は科学だけで進歩していった結果、異世界というものが存在することさえ知らなかった。あくまで想像の産物としか思われてはいなかったのだ。それを知ったのはひとえに少年が持ってきた異世界という存在の裏づけと、魔術の存在があつてこそである。魔術がある世界のほとんどは異世界の存在どころか世界の移動法まで編み出している。魔術だけが進歩した世界でも、だ。勇者の召喚なんかは、その最たる例といえる。

対して科学は、異世界の存在すら捉えられなかった。進歩してきた文化が似通っているということはその世界は科学が主流であるということ。そうなるとこれまで科学だけを進歩してきたこの世界にとって得るものが少ない、ということとで交流なんて全く無い。

彼女、天木鹿枝あまぎ かえはそんな世界の出身らしい。埋蔵金と同レベルのものを発見するのは運が良いのやら悪いのやら……。どちらにしろよくここに來れたなー、と思う。なにかやったりしたのか聞いてみると。

「えっと、多分なんですけど……二日前の夜逃げしている時に、公園に入ったんです。その時、昔本で読んだ退魔の陣っていうのを思

い出して……これで彼に何か影響を与えられないかと思って公園の地面全体を使って覚えていた魔法陣を書いていたら疲れて眠ってしまつて……それで朝起きたらここの近くに」

とのことらしいが……公園で寝たとかいろんな意味で危ない状況だな、それ……。さらに話を聞くと、昨日はどこか分からないという状況が怖くて寝られなかったので一晩中歩いていたらしい。夜の女の子の一人歩きも普通に危ないだろう。天木さんはちょっと女性として危ない橋を渡りすぎだと思う。

とにかく、天木さんには説明できる限りの異世界に関する事について聞かせた。身振り手振りもフルに使ってだ。ところどころで頭に疑問符を浮かべていたが、これ以上噛み砕いた説明ができるほど、オレは頭が良くない。というか限界……

「ごめん天木さん、ちょっとこれ以上はどう説明すればいいのか……あとのわからないところは樫羽にでも聞いてもらえる……?」
天木さんはちょっと納得いつてなさそうだが、頭を絞り尽くして憔悴しきつてるオレを見て、この場は納めてくれた。

「あの……ところでお父様のほうは……」

「さあ? 何年も前に「俺の最愛の人を助けにいく」って言つて出たつきり帰つてこないから、今日も帰らないと思うけど……」

たぶん母さんのことだと思うが、母親の記憶というものがオレには全くないので、いったいどんな人なのかはわからない。しかし、父さんがオレに「最愛の人」と言っていたのだから、多分すごい人なんだろうけど……。天木さんは、帰つてこない、の部分に反応して焦つたような表情を見せる。

「あ、あの、あまり聞いてはいけないような話だとは思ふんですが、それって失踪じゃあ……」

「どうなんだろう? オレたちが心配してもしなくてもいつか帰ってくるだろうから気にしたことがないなあ」

「そ、そうですか……すみません」

謝らないでいいよ、とシュンとした天木さんに言ったが、気にしているのか表情は変わらなかった。でもあの父さんだからなあ……帰ってこないで手紙で「もう俺ここに住むわー」とか送ってくることがあるそうでこわい。さすがにそれはないと信じたいが……うーん。

その時、コンコン、とノックの音が聞こえ、かしわ榎羽が様子を伺うようにして入ってきた。

「……兄さん、天木さん。話はまだ続いていますか？」

「榎羽……いや、もう終わったところだ。ちよっと別の話で長くなったけど」

「そうですか。夕食のあとから二時間近い間、兄さんの部屋から音がしませんでした少し心配になりましたが、話はついたみたいです。ね。それで兄さん、別の話とは？」

「あー、まあ世間話みたいなもんだ。特に大事ってこともない。何か用があったりしたのか？」

「いえ……ただ、もう夜も遅いので天木さんはどうされるのかと。さすがにお客様を居間で寝かせるのはどうかと思いますし……」

時計を見ると、現在時刻は23時の少し前だった。天木さんは時間の流れに気づいていなかったようで、時計を見て思い出したように欠伸あくびが出ている。そういえば一晩中歩いていたっていったし、ほぼ徹夜だったのだろう。それに彼女の実家はこの世界にはない。となると、確かに泊めざるを得ないのだが……ちよっと待て。

「榎羽。なんで天木さんが泊まるってわかってるんだ？」

それを聞かれた榎羽はすぐにそっぽを向いて、

「……いえ、この時間に女性を帰らせるのは危ないと思って」と普段どおりの口調で返してきたが……こいつ絶対聞いてただろ、というのが丸分かりな態度だ。オレも天木さんに策？がバレたし、もしかして普通の兄と妹以上に兄妹らしいんじゃないか？と思ったが、正直それはどうでもよかった。早く天木さんが寝る場所を決め

ないと、このままテーブルで寝てしまいそうだからだ。

「よし、檜羽。明日は父さんの部屋の中を片付けよう。それから天木さんにはそこで寝てもらおうとして、今日はこれから二人で問題を解決するという事で親密を深めるためにオレと天木さんが一緒に「兄さんってパンチングマシンみたいな顔ですよね」うそですごめんなさい！」

ちよつと調子に乗ったら頭を下げる事になった。どうみても兄妹らしい姿ではない。普通の妹は兄の顔をパンチングマシンなんかとして扱ったりはしないはずだ。周りに兄妹がいなくてよくわからないが、そういうものだろう。夢なんて見てないぞ？

檜羽がやれやれ、といった風に握りかけたこぶしを下ろす。だが、その目は家族を見るにしてはおかしいんじゃないかね？

「……まったく兄さんは。とりあえず天木さん。今日のところはわたしの部屋で寝ましょう。二人で寝れるくらいには広いですし、なにより兄さんの手が届くところには置いておけません……兄さん、それでは」

檜羽が天木さんに呼びかけると天木さんは立ち上がってついていくのだが、どうにもまっすぐ進まないわ、目が開いてないわで危なっかしい。檜羽が肩を貸して出て行こうとするが、檜羽には少し聞きたいことがあったので天木さんを寝かせたらここに下りてきてほしいというっておく。

「それじゃ、天木さん。おやすみ」

すでに起きてるんだか寝てるんだかわからない天木さんにさういふと、天木さんはこっちを見て……形容するならば「ニヤァ」という擬音が似合うような笑顔をこちらへ向けてきたが……あれってどういう意味なんだ……？

結局二人が出て行った後はその顔の意味を考えていたが、何も浮かんではこなかった。

十十十十十十十十十十十十十十十十十

数分後、櫛羽が居間に戻ってきた。やけにはやかったが、どうも布団を敷いたらボディプレスでもしたいのか、と言いたくなるようなダイブを布団にしてそのまま寝てしまったとのこと。天木さんは天然なのか何なのか、よくわからなくなってきた。

櫛羽が向かいのイスに座って、話を聞く姿勢を見せる。

「それで、兄さん。聞きたいことは何ですか？」

「少し気になっただけなんだが……天木さん、なんだかお前が部屋に行ってから緊張が解けたようになってたんだよ。それでオレがいない間になにかあったりしたのかな、と」

櫛羽は、ふむ、というように感じで口元に手を当てる。考える——というわけではなかったらしくすぐに口を開いた。

「心当たりというものはないですね。まあ、もしかしたら、というものはありますが」

「もしかしたら？　なんかきついことでもいったりしたのか？」

「そういうことではなく……わたしの存在に違和感を感じていたのかもしれないね。単純に慣れたのかもしれないが」

「……違和感？　なぜ会ったこともないのに櫛羽に違和感なんて感じるんだ？」

「彼女がもと居た世界の兄さんに会っていたら、そうではないかもしれないよ？　わたしは元々この娘だった、というわけではありませんし……でもそれはあくまで仮定でしかない話ですから、聞かないほうがいいかもしれませんね」

もうこいつ聞いていたことを隠す気もないな。しかしもと居た世界のオレ……か。確かにそんなことはあるとは思えな——くもないな。寧ろそのほうがしっくりくる。

「なあ櫛羽。オレ、天木さんに会ってまだ名前もいってないうち

に「遠原さん」って呼ばれたんだが……」

「……じゃあもうほとんど確定じゃないですか。というか、そういうことはできる限り最初に言ってください。まったく、なんでこんな事もわからないんですか、バカらしい」

ええ……なんか、すごいボロクソ言われてるよ……確かに考えても仕方ないからと投げ出したオレが悪いのかもしれないけど、まさかここまでいわれるとは。これが年上のお姉さんとかに言われたならまだいいが、年下の妹に言われるとちょっと泣きそうだ。しかも少し様になってるあたりがよけいきつい。

「聞きたいことはそれだけですか、兄さん？」

「あ、ああ……それだけ、かな？」

「なぜ疑問系なんですか。別にいいですけど……ところで兄さん。わたしからも聞きたいことがあるんですが、いいですか？」

いつもならば「いいですね？」というように、あまり話を聞こうとしない檜羽にしては珍しい、確かめるような言葉だった。なぜ急にこんな態度になったのかはわからないが、それでも拒否する理由はない。

「いいですか、なんて言わなくていいだろ？家族同士でも少しは気を使ったほうがいいとはいえ、いきなりそんな態度でこられたら焦ってしょうがない」

「そうですね。では兄さん……聞きたいのですが……わたしは、兄さんの妹であるつもりです。たとえ血が繋がっていなくても、そう思っています。でも兄さんは……わたしを戸籍上の妹でしかないと……そう考えてるんですか？」

……全部聴いてたんじゃないか。もう盗み聞きしていたことを誤魔化す気はないのかと思う。しかしそれよりも今聞かれたことが気に食わない。

「……そんなわけないだろう。オレはお前がただの妹だなんて風には思っていない。殴られても罵られても構わない。オレはお前の兄でいたいんだ。いつまでも……たとえお前の本当の両親が来ても……」

：お前の兄をやめたくない。お前は——大切な妹、だよ」

檜羽が、それを聞いて安堵したかのように表情を和らげる。普段少し笑うことはあっても、表情がそこまで変わらない檜羽としては、かなりの変化だ。勢いでここまでいってしまったが、実際にウソを言っただけなのだから問題ない。ただちょっと自分がシスコンに見えるというだけだが——まあ、いいか。シスコンでも。

「……ありがとうございます、兄さん。……わたしも——」

何か言いかけた檜羽の意識が、飛んだ。テーブルにガン、と額をぶつける。ケガをしてないか心配になったので、近づいて意識があるかどうかを確認しようと顔をぺしぺしと叩く。

「……………う」

あ、意識はあるのか。じゃあ大丈夫だな、と思いかけた瞬間。

「……………えへっ♪おっにいちゃーん！ひっさしぶりー♪」

……お兄ちゃん？ま、まさかこいつ……！

「お、お前「カシワ」だな！？何でまたこんなときに……！」

『カシワ』とは、普段は遠原檜羽の中に眠っている人格のことである……というか、多分こちらが本来の檜羽なんだろうが、こうして表に出てくると自体が少ないので基本的に裏人格という扱いをしているのだ。

普段の檜羽との違いは……まあ見ればわかるかもしれないが、とても素直だ。普段も気に入らないことを正直に言うという意味では素直ではあるが、こちらは人への好意をとっても強く表に出す。特に先ほどの「お兄ちゃん」なんていう発言なんかもろにそれだ。最初にオレを兄と呼んだのもこの『カシワ』である。二年前まで普段の檜羽からは天木さんのように「遠原さん」と他人行儀な呼び方をされていたが、『カシワ』からは最初からお兄ちゃんと呼ばれていた。ちなみに檜羽が初めて兄さんと呼んでくれた時は嬉しさで枕を濡ら

した。

『カシワ』が驚いているオレに対して少し不機嫌そうな表情を向けた。

「むー、久しぶりに再会したんだからもうちよつと嬉しそうにしていもいいでしょー？」

「いや、再会っていつでもいつもの樫羽とは毎日顔を合わしてるし……というか、その顔で子供みたいなこというなよ」

「あー、そうだった。もう子供じゃなかったねー……ワタシ」

そういつて自分の胸を下から上げ下げして擬似乳揺れとでも言う行為を行っていた。……こういうところを見るとたまに樫羽を妹じゃなく一人の女性に見そうなことがあるが、理性とは案外強いものである。しかも揺らすといっても上下する程度だ。この程度で折れる心はしていない。

「ちよつとは反応してよー、お兄ちゃん？」

「ふ、ふん！天木さんより少し大きい程度じゃオレの理性は折れないね！！」

でもじっくりとは見ちゃうんだなー。だって揺れてるんだぜ？普段は見れないような光景だぜ？ただ妹なのが哀しいってだけで……ついでに天木さんの胸まで見ていたことに気づくと死にたくなってきた。服越しとはいえサイズを目測とかセクハラもいいところじゃないか……

「へえー、そうなんだー……えいっ！」

いきなりカシワが上半身に抱きついてきた。しかも完全「当ててんのよ」仕様だ。顔の話だが。どうやら胸を当てにくるような子には育たなかったようだ。残念とは思わん。

オレの胸に顔を擦り寄せてくる『カシワ』の顔は満面の笑みに塗りたくられている。樫羽の顔なので違和感は拭えないが、それでも嬉しい気持ちが伝わってくるので、こっちも笑顔になってしまう。

「カシワ……」

「あー、お兄ちゃんが一生ワタシのそばにいてくれるなんて、

嬉しいなあ〜！」

「待て、そこまでは言っていないぞ！？　というかそういう発言は止める恐ろしい！」

病んだ妹とか全力でお断りする。特に『カシワ』に殺しにかかられたら本当にやられた挙げ句「ズウツト、イツショダヨ……」とか言われそうだ。

「あはは、今のはさすがに冗談だけどさっきの言葉が嬉しくてね、つい出てきちゃった。はい、サービスしゅうりょ〜」

『カシワ』がオレから手を離して元のイスに座る。しかし『カシワ』は本当に、樫羽とは真逆だなあ……普段からルンルン気分でスキップしてそうな『カシワ』が普段は動じぬ心できれいに歩く樫羽の体を使っていると誰やねんと言いたくなる。まあ可愛いからそれでもいいけど。

「さっきのって……あのお前の兄で、ってやつか？」

「そ。だっていつまでも家族でいてくれるって本気で言ってくれたもの。あの子もうれしくなるよ」

『カシワ』はいつも、樫羽のことを「あの子」と言う風に呼ぶ。『カシワ』のほうはもう一つの人格を認識しているのだ。対して樫羽は別の人格というのをわかってはいない。記憶が無いときがある、としか思っていないようだ。人格が変わっているときの記憶もないので、単純に『カシワ』のほうが上位の人格なのだろう。

「本気で、ねえ……基本いつも本気なんだが」

「それなら、今日はいつもよりも本気だったってことだねえ。最近は不安だったみたいだよ？　あの子」

「……そうだったのか？　じゃあこれで悩むこともなくなるな」

「いやそんな軽く言わないでよ……本気なんじゃなかったの？」

「何言ってるんだ。これで本気だ」

これは自信をもって言える。なのに『カシワ』は呆れた顔で、ジト〜っとこちらを見ていた。なぜだ。

「……ああ、そう……ワタシはお風呂にでも入ってもう寝るよ……」

…」

「そうか。じゃあオレも寝るかな」

とりあえずそろそろ本格的に寝たいので部屋に戻ろうとすると、『カシワ』がなにか悪いことを思いついたような顔をして笑う。

「……あ、一緒に入る？」

「………誰が入るか」

当然だ。そんなことをすればこいつのことなので、途中で確実に櫛羽に体を渡してオレが血祭りに上げられる。そもそもまず中三と高二の兄妹が一緒に風呂に入るわけがあるか。

「ふふ、やっぱり本気じゃなかったね。お兄ちゃんなら女の子との混浴を断るわけが」

「調子に乗るな、このバカ」

『カシワ』にペチン、と軽いデコピンをお見舞いして、部屋へと戻る。「あうう」とか後ろから聞こえても気にしない。風呂はさつきシャワー浴びたから別にいいだろうし、もう寝るつもりだ。

ベッドの上で横になって寝ていると、誰かが部屋に入ってきたのに偶然気づいたが、眠いので話す気はない。とにかく眠る。

———ありがとう。

そんな言葉が聞こえたような気がすると同時に、オレの意識は沈んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4946z/>

異世界の方、いらっしゃい！

2011年12月22日18時49分発行